

日本ジオパーク認定申請書

十勝岳ジオパーク構想
ASPIRING TOKACHIDAKE GEOPARK



2021年4月
十勝岳ジオパーク推進協議会

目次

A	基本情報（中村）	1
B	提出書類一覧（中村）	4
C	地域の位置（中村）	4
D	主要な地質地形学的特徴（見どころ）と他の要素（中村）	4
E	ユネスコ世界ジオパーク基準の検証	
E.1	領域	
E.1.1	地質地形遺産及び保全（中村）	6
E.1.2	境界線（中村）	9
E.1.3	可視性（ビジビリティ）（宮崎）	9
E.1.4	施設・インフラ整備（宮崎）	9
E.1.5	情報、教育、研究（山中、中村）	11
E.2	その他の遺産	
E.2.1	自然遺産（中村）	16
E.2.2	文化遺産（中村）	17
E.2.3	無形遺産（中村）	18
E.2.4	気候変動と自然災害への関わり（中村）	20
E.3	管理運営（宮崎）	20
E.4	重複（オーバーラッピング）（中村）	25
E.5	教育活動（中村）	26
E.6	ジオツーリズム（村上）	28
E.7	持続可能な開発とパートナーシップ	
E.7.1	持続可能な開発に関する方針（山中）	31
E.7.2	パートナーシップ（山中）	33
E.7.3	地元コミュニティや先住民の全面的かつ効果的な参加（中村）	34
E.8	ネットワーク活動（中村）	35
E.9	地質鉱物資源の販売（中村）	36
E.10	防災・安全対策、防災教育、災害対応（宮崎）	36
F	日本ジオパーク認定を希望する背景と理由（中村）	38

※（）書きの氏名は、そのページを作成した事務局員名を記載しています。

宮崎事務局長、中村事務局次長（専門員）、山中専門員、村上事務局員

A 基本情報

1. 申請地域の名称

十勝岳ジオパーク

Tokachidake Geopark (英語表記)

2. 位置

北海道上川郡美瑛町域および空知郡上富良野町域

北緯 43° 22′ 50″ ～43° 40′ 09″、東経 142° 19′ 13″ ～142° 54′ 44″

3. 面積 (km²)

総面積 913.88 km² (国土地理院による。2020 年 7 月 1 日現在)

4. 自然地理・人文地理学的特徴の概要

地勢 本申請地域は、石狩山地と幌内山地に挟まれる上川盆地のほぼ中央部に位置する(図 1)。本地域の東側には、大雪山から十勝岳にかけて標高 1400～2077m の火山群が連なる。中でも十勝岳は、20 世紀以降に 3 回のマグマ噴火を繰り返した活動的な活火山である。その山麓には、十勝岳火山群の形成前に生じた巨大カルデラ噴火による火砕流堆積物が広がっており、「波状丘陵」とよばれる特有の地形を作る。申請地域の西側は、標高 800～850m 程度の幌内山地で区切られる。沖積低地は比較的狭く、美瑛川および富良野川沿い(美瑛市街および上富良野市街の周囲)に、合計 20～30km²程度が広がるのみである。

気候 本地域は、降水量が比較的少なく、寒冷な環境である。美瑛～上富良野市街付近では年平均気温 6.6℃、年間降水量は 1,000 mm となっている。最暖月(8 月)及び最寒月(2 月)の平均気温はそれぞれ 21.3℃、-8.1℃で、寒暖の差が激しい内陸性の気候である。

生態系 山麓部では広大な森林帯が分布し、低標高から針広混交林帯、針葉樹林帯、ダケカンバ帯の垂直分布がみられる。特に植物相の変移を観察できる天然の針広混交林帯は世界的にみても優れた景観を呈している。また、標高が高くなるにつれて森林限界、ハイマツ帯へと推移し、山頂部付近では高山植物群落を形成する。十勝岳周辺は、過去の火山活動により植物が定着しない領域がある。このように、豊かな森林や高山植物がみられるほかは、極地にも似た寒冷な自然環境であるため、このような環境に適応したエゾナキウサギのほか、エゾヒグマやエゾシカなどの大型哺乳類、クマゲラやシマフクロウなどの鳥類、ウスバキチョウやアサヒヒョウモンなどこの地域特有の高山蝶が生息している。

歴史 本地域には、縄文時代の遺跡は分布するが、旧石器時代や続縄文時代(本州の弥生時代に相当)以降の遺物・住居跡はごく少数である。美瑛川や富良野川の流域は、活火山から流出する酸性物質の影響で飲料水が得難く、また、サケなどの魚がほとんど生息しないことがその理由と考えられている。ただし、近世以降は上川アイヌの狩猟地であった痕跡があり、十勝アイヌ往来の地でもあった。1858(安政 5)年には、上川アイヌの先導により松浦武四郎らがこの地を経て十勝平野へと通過した。明治時代に入ると、和人の入植が始まる。美瑛町では 1894(明治 27)年に兵庫県より、上富良野町では 1897(明治 30)年に三重県より入植者が訪れ、続いて全国各地より入植がはじまった。

社会・経済 本地域では農業が主な産業であり、第1次産業従事者は人口の25.2%で、全国平均の4.2%よりも著しく高い。第2次産業は11.2%（全国平均25.2%）、3次産業は63.6%（全国平均70.6%）と、全国平均と比べてやや低い。本地域の農業は、主に台地上（波状丘陵）で行われており、ジャガイモ、小麦、豆類、ビートなどが輪作される。またアスパラガス、トマト、特用作物のホップなどの栽培も盛んである。河川沿いの低地では稲作も行われており、生産者が独自の基準を設けた「特別栽培米」の生産を進めている。農業とともに観光業も盛んで、十勝岳連峰の山岳風景をはじめ、波状丘陵に広がる農業景観、ラベンダー畑、十勝岳山麓に分布する温泉などが観光資源となっている。

人口 現在の人口は、美瑛町9,704人、上富良野町10,380人であり、合計20,084人である（2021年3月31日現在の住民基本台帳登録）。2015（平成27）年の国勢調査によると0～14歳の人口は全体の12.0%、15～64歳は54.8%、65歳以上は33.0%となっている。1990年には、美瑛町12,769人、上富良野町13,265人であり（合計26,034人）、30年間で77%までに減少した。2018（平成30）年の国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」の報告では、2040年には、両町で13,418人になると予測している。

交通 主要な交通路は、旭川市から太平洋側の日高町へと繋がる国道237号、および、旭川市と富良野市をつなぐJR富良野線が、いずれも美瑛町・上富良野町を縦断しており、主要な交通路となっている。美瑛町に隣接する東神楽町には旭川空港があり、東京（羽田）、名古屋（中部国際空港）、台北便等が就航している（台湾便はCOVID19対策のため2020年5月1日より運休）。

5. 運営組織

十勝岳ジオパーク推進協議会

6. 連絡先（氏名、肩書、電話番号、メールアドレス）

宮崎敏行 事務局長

電話：0166-76-4004 メールアドレス：info@tokachidake-geopark.jp

7. ウェブサイト

十勝岳ジオパーク構想 公式サイト <https://tokachidake-geopark.jp/>

8. SNS

Twitter https://twitter.com/tokachidake_geo

Facebook <https://www.facebook.com/tokachidakegeopark/>

Instagram https://www.instagram.com/tokachidake_geo/

YouTube

https://www.youtube.com/channel/UCLi8WawyF_7zbyQpT8w0xMA?view_as=subscriber

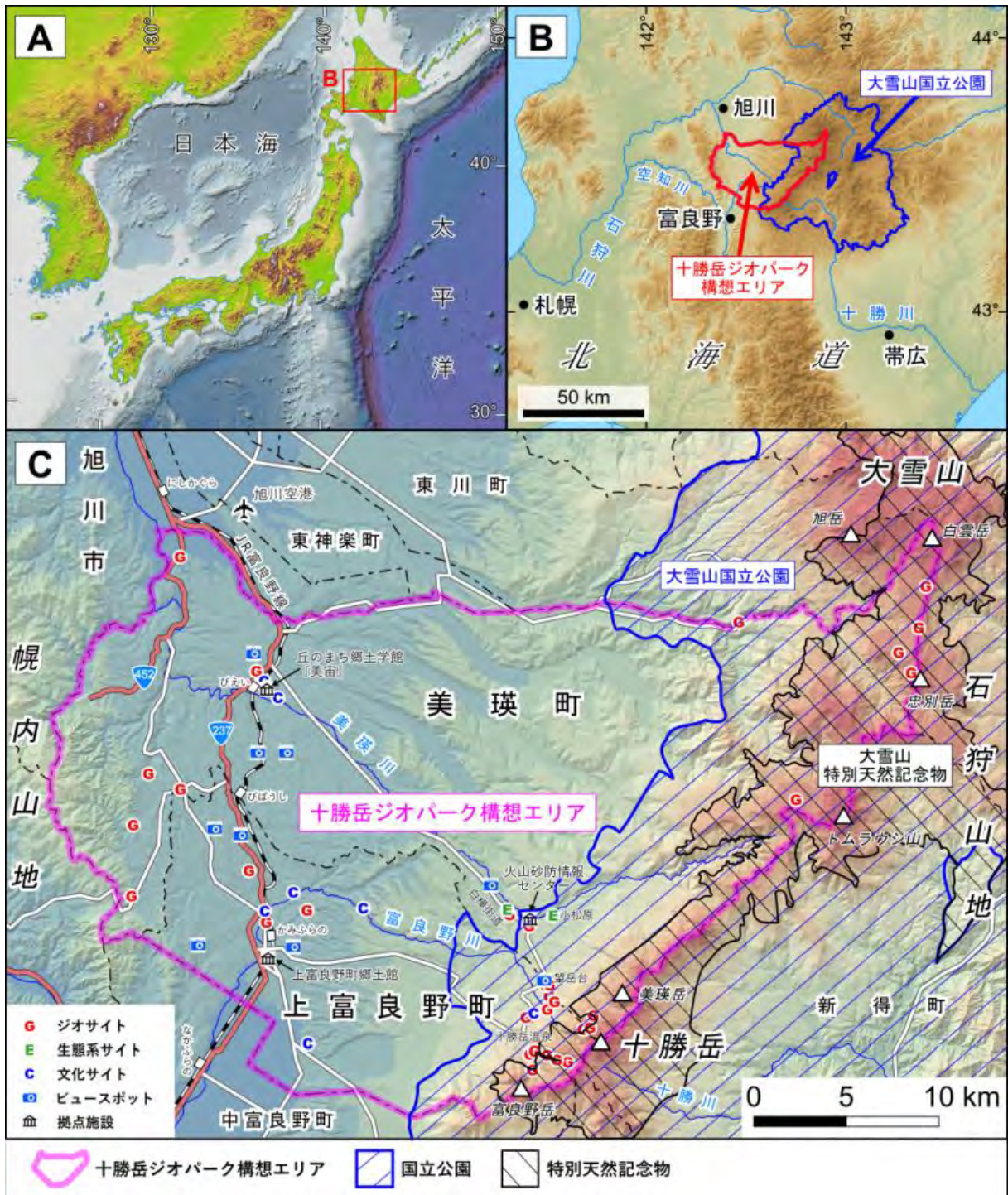


図1 申請地域位置図

SRTM15+ (Tozer et al., 2019, *Earth and Space Science* 6-10)、SRTM3 (NASA)、基盤地図情報数値標高モデルおよび地球地図日本 (国土地理院)、国土数値情報 (国土交通省) を利用して、十勝岳ジオパーク推進協議会が作図。

B 提出書類一覧

1. 申請書
2. 申請書の別添書類
 1. 自己評価表
 2. 申請地域の地図
 3. 申請地域の地質学と地理学の概説
 4. 申請地域におけるジオパーク構想と関わりのある文献リスト
 5. サイトリスト
 6. ジオツアーの実績一覧表
 7. 十勝岳ジオパーク構想基本計画

C 地域の位置

申請地域は北海道のほぼ中央（図 1 参照）、美瑛町と上富良野町の範囲である。北緯 43° 22′ 53″ ~43° 40′ 09″、東経 142° 19′ 13″ ~142° 54′ 44″ の範囲にある。

D 主要な地質地形学的特徴（見どころ）と他の要素

火山活動と災害を学び・伝えることで、火山と共生する地域を創ることが十勝岳ジオパーク構想の目的である。また、十勝岳ジオパーク構想のテーマは「丘と火山がおりなす彩り」である（図 2 参照）。このテーマは、さらに 3 つのストーリー「北海道の屋根十勝岳ものがたり」「大地に育まれた火山と共生する美しい丘のまち」「十勝岳泥流のつめ痕に北の大地を切り拓く」に細分される。

「丘」の地形のもととなっているのは、鮮新世後期（ピアセンジアン）から更新世前期（カラブリアン）にかけて北海道中央部で発生した 2 回ないし 3 回の大規模火山噴火による火砕流堆積物である。これらの噴火によって、北海道中央部にカルデラが形成されたと考えられる。厚い火砕流堆積物の表面は、その後の侵食および周氷河性マスムーブメントによって、なだらかな傾斜が作られ、「波状丘陵」となった。さらにその景観は、近代以降の 120 年間、地域住民による開墾および畑作農業で作られた田園風景によって特徴づけられる。火砕流堆積物よりなる台地は、大規模農業を可能とする広大な農地を提供するが、一方で、作物栽培のための栄養分に乏しく、連作障害を引き起こしやすいデメリットがある。そこで、ジャガイモ、小麦、豆類、ビートなどを輪作することで、この欠点を解消することとなった。輪作のプロセスにより、多彩な農作物がつくる変化にとんだ景観がつくられ、「パッチワークの丘」と呼ばれる観光資源となった。当地域の「丘」は、地形・地質、農耕、観光が一体となった貴重な地域資源である。この波状丘陵は、全体で 1 つのジオサイトとし、7 つのビュースポットから眺望できる。また、3 回の大規模噴火による火砕流堆積物は、5 つのジオサイトで観察できる。

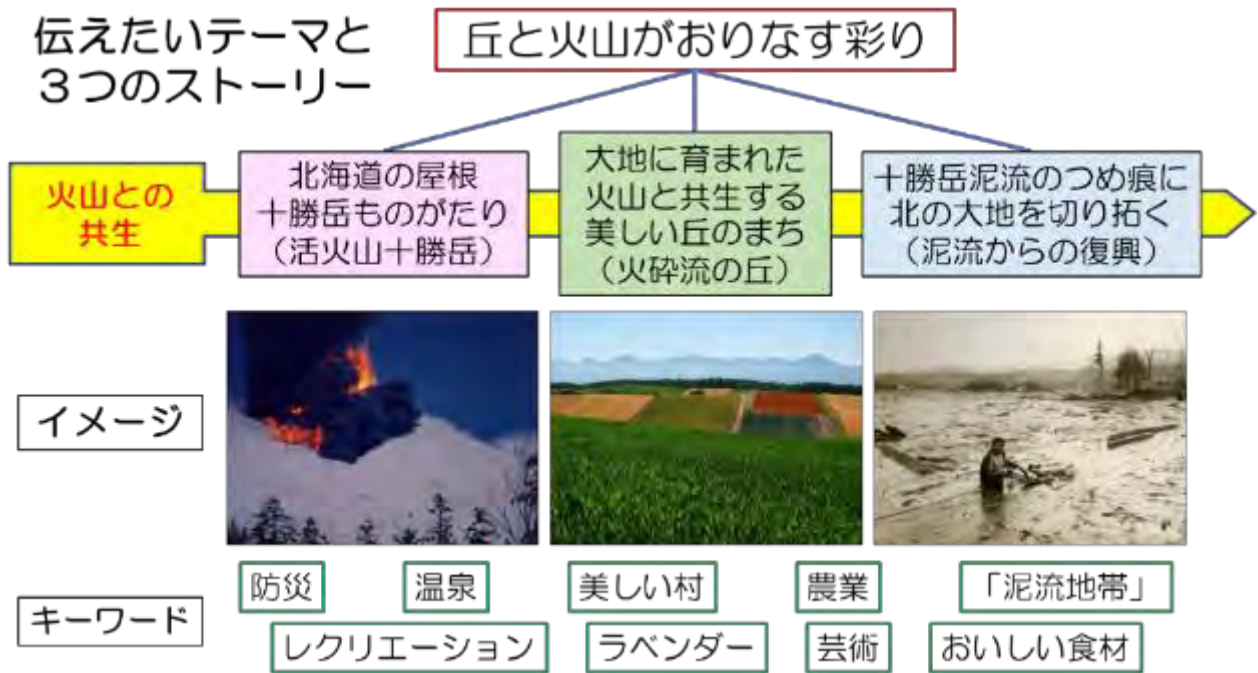


図2 十勝岳ジオパーク構想のテーマと3つのストーリー

本構想のテーマにある「火山」とは、活火山に指定される十勝岳である。上記の大規模噴火によるカルデラ地形は、チバニアン以降の火山活動ですでに埋積され、十勝岳連峰と呼ばれる火山群となった。その主峰である十勝岳（標高2077m）は、過去100年間に3回のマグマ噴火を行ったほか、小規模な爆発やその他の火山活動を頻繁に繰り返している。十勝岳は、中腹の標高930m前後まではアクセスが容易（路線バスが運行）で、そこから山頂にかけて、溶岩流、火砕流、泥流、一連の噴火口などの地形・地質を14のジオサイトと1つのビュースポットで観察できる。つねに噴煙を上げる火口は、訪れるものに地球が「生きている」ことを実感させる。様々な火山地形・地質に容易にアクセスできることで、地球科学者や大学生はもちろん、子供をふくむ一般の来訪者が地球科学や郷土の歴史、火山災害を学ぶ上で格好の教材となっている。また、温泉や、トレッキング、スノーシューなどの体験アクティビティを通じて、火山のめぐみに接することができる。さらに、申請地域はジオパーク活動を通して、地域住民、自治体、北海道開発局、大学、気象台等の研究者、防災担当者との連携を進め、来るべき火山噴火における減災を実現しようとしている。



図3 1926年の十勝岳噴火にともなう泥流被災地域(オレンジ色)

本構想を推進する美瑛町・上富良野町の共通点は、1926（大正15）年の十勝岳噴火災害の被災地だということである。この噴火では、水蒸気爆発と岩屑なだれが原因となって、噴火当時（1926年5月24日）の山腹にあった残雪を融かし、融雪型泥流を発生させた。この泥流は、美瑛・上富良野の市街まで到達し（図3）、合計144人の人的被害をもたらした。とくに、上富良野町域において被害は甚大で、浸水域には硫黄

分を含んだ土砂が層厚 10cm 以上堆積し、大量の流木がその表面を覆った。荒廃農地の放棄を主張する意見もあったが、復興を主張する吉田貞次郎村長（当時）を先頭に、地域住民の数年間にわたる努力によって再び農地として利用できるようになった。小説家の三浦綾子は、この災害から復興にいたる様子を地域住民から詳細に取材した上で、上富良野に生きる 4 人の若者を主人公とした小説『泥流地帯（正・続）』を執筆し、開拓農家の過酷な生活と災害、復興の様子を生きいきと描写した。この『泥流地帯』のストーリーをたどりつつ、3 つの文化サイト 2 つのジオサイトをめぐること、ドラマチックなジオツアーが可能となった。

前述した 3 つのストーリー（図 2）を発信するため、既存の 3 つの展示施設「十勝岳火山砂防情報センター」「美瑛町郷土学館『美宙^{みそら}』」「上富良野町郷土館」（図 1-C）を改装し、拠点施設として整備を進めている（2022 年度完成予定）。

以上のように、本構想エリアを訪れることで、火山活動への理解を通して地球が「生きている」様子を実感できる。また、災害からの復興の様子や、来るべき噴火への備えを学ぶことで、地域が火山と共生する様子を目の当たりにできるだろう。

E ユネスコ世界ジオパーク基準の検証

E.1 領域

E.1.1 地質地形遺産及び保全

1. 申請地域の地質地形に関する概要（別添書類 2（地図）および 5（サイトリスト）を参照）

北海道の形成

北海道を含む日本列島は、ジュラ紀～白亜紀の海洋プレート（イザナギプレート）が大陸プレートに衝突して沈み込んだ際の付加体および海洋底が主要な骨格となり、その後のプレート運動によって現在の地質構造および大地形が作られた。その過程において北海道は、それまで 3 ないし 4 つに分かれていた地塊が、およそ 2000 万年前にほぼ現在の位置で衝突したことで、形成された。申請地域の西方を区切る幌内山地は、ジュラ紀の海洋プレートを構成する玄武岩類（サイト 33）および白亜紀以降の変成岩類（サイト 34）で構成されており、プレート運動による北海道の形成と地殻変動を反映している。

十勝カルデラの大規模火山噴火

鮮新世ピアセンジアンから更新世カラブリアンにかけて、北海道中央部では相次いで大規模なカルデラ噴火が発生した。申請地域は、約 275 万年前の雨月沢火砕流堆積物（サイト 14）、約 200 万年前の美瑛火砕流堆積物（サイト 26、27）、約 125 万年前の十勝火砕流堆積物（サイト 12、13）の分布の中心域であり、これらの堆積物が「波状丘陵」を作っている。この相次ぐ噴火は「十勝カルデラ」を形成したと考えられるが、チバニアン以降に相次いだ火山活動でカルデラは埋積され、さらに現在の十勝岳連峰が形成された。

十勝岳の火山活動

十勝岳連峰の主峰、十勝岳は 3 万年ほど前に形成され、完新世以降も活発な火山活動を繰り返している。とくに大規模な噴火は、5000～3000 年前にかけてグラウンド火口（サイト 1）周辺で発生した。少なくとも、2 回の溶岩流と 2 回の火砕流を噴出し、特に 3300 年前の火砕流（サイト 8）は山麓の白金温泉まで到達した。その後、スリバチ火口、北向火口、中央火口で火山活動が行われた（サイト 2、3）。20 世紀にはいると、1926 年に中央火口（大正火口。サイト 3）が噴火し、融雪型泥流を発生させた。1962 年には前十勝付近で相次いで噴火し、62 火口群を形成した。62-II 火口では 1988～1989 年にも噴火が起き、活発な地熱活動や噴気活動は現在も続いている。近い将来の噴火が予想され、火山活動の常時監視が行われている。

高山環境

十勝岳から大雪山に連なる稜線には、70 万～110 万年前の火山活動で作られた、標高 1700m 以上の高山が続く。この山域では、冬の強い西風が当たるため深さ 1m を超える季節凍土が形成され、場所によっては永久凍土が存在する。構造土やバルサなどの周氷河地形を観察できる（サイト 20～24）。

2. 申請地域の地質地形サイト一覧と説明

申請地域の地質地形サイト（ジオサイト）、生態サイト、文化サイト、ビュースポットの一覧を、サイトリスト（別添書類 5：サイトリスト参照）に掲載している（位置は別添書類 2：申請地域の地図参照）。これらサイトはいずれも「丘と火山がおりなす彩り」のテーマにかかわる地点を認定している。

3. サイトの国際的あるいは国内的、地域的な価値

サイトの国際的、国内的、地域的価値づけについても、別添のサイトリストを参照。国際的価値があるとしたジオサイトは、活火山としての十勝岳を示すサイト、融雪型火山泥流にかかわるサイト、波状丘陵、永久凍土の存在を示すサイトの、計 6 サイトで、いずれも国際的な学術誌に研究成果が公表されている（別添書類 4：文献リスト参照）。また、十勝岳の地質や、大規模火砕流堆積物については、古くから多くの研究成果が公表されており、これらは少なくとも国内的価値を有すると考える。反対に、北海道や当申請地域において価値のある地形・地質であっても、他地域において確認できるものについては「北海道内」あるいは「地域的」価値に位置づけた。

申請地域には、世界遺産など国際的に認定された自然遺産は存在しない。一方で、十勝岳から大雪山の標高およそ 800m 以上の山岳エリアの大部分は「大雪山国立公園」に指定（1934 年）されている（図 1 の B および C）。23 のジオサイト、1 つの生態サイト、1 つの文化サイトが国立公園エリアに含まれる（サイトリスト参照）。また、標高およそ 1,300m 以上のエリアは文化財保



図4 十勝岳山頂およびその周辺の地形
国土地理院作成「地理院地図/GSI Maps」に加筆。

護法による「特別天然記念物」に指定（1971年）されており（図1のC）、9つのジオサイトおよび2つのジオサイトの一部がそのエリア内にある。2018年には日本遺産「カムイと共に生きる上川アイヌ」が認定され、十勝岳もその構成文化財のひとつに登録された。

4. ジオサイトの保全と適正な維持管理に関する問題

申請地域の面積の約30%は「大雪山国立公園」に指定されており、34のジオサイトのうち21は、自然公園法によって保護される。十勝岳ジオパーク推進協議会は、環境省の東川管理官事務所と連携しこのエリアおよびサイトの保全を行っている。また、美瑛町・上富良野町ともに景観条例を制定していることから、その他の法令と合わせて、申請地域の全域が法的に保護されている。

ジオサイトおよび生態サイト、文化サイト、ビュースポットについては、それぞれ地球科学的価値を記した「サイトカルテ」を作成し、管理、保全、調査・研究を進めている。

申請地域では、冬季の気候環境がきわめて厳しいことから、露頭などのジオサイトや屋外展示物、解説板等の風化がすすむおそれがある（図5左）。この問題については、今後ガイド組織や自治体、地元団体等と協議を進める予定で、冬季の見回りや、ジオツアー等での活用方法を進めることで継続的なモニタリングを進めたい。現状では、サイト案内板・解説板等の比較的小さな人工物、展示物は、ブルーシートで「冬囲い」するなどの対策を行っている（図5右）。文化サイトにおける屋外展示物、石碑等についても同様の方策を模索している。



図5（写真左）文化サイト「十勝岳爆発記念碑の巨岩」の冬の様子（2020年12月）、
（写真右）ブルーシートで冬囲いされた解説板

望岳台（標高930m）から十勝岳にかけて、特に気候環境が厳しいためジオサイトの風化の進行が懸念される。また、登山客、観光客が多く訪れるため、人為的に荒らされる可能性がある。そこで、本協議会では2021年度から保全指導員を配置し、これらジオサイトの巡視にあたっている。

エリア内の登山道や避難小屋の整備・修繕を、両町役場、環境省、地元山岳会、高等学校（上富良野高校）などと協力して、進めている。

環境省が毎年8月第1日曜日に実施している「自然公園クリーンデイ」（図6）には本協議会も毎年参加し、白金温泉・十勝岳温泉・吹上温泉の各地区の清掃活動を行っている。

また、本構想エリアでは、住民参画による清掃活動や植樹・植栽活動が活発で、山岳部や波状丘陵地、文化サイトが存在する主要道路付近を対象に実施している。清掃活動は毎年延べ160kmの区間の分別清掃に取り組むほか、高校生ボランティアによる登山道整備などの保全活動を進めている。特に、十勝岳山麓の小学生で構成する十勝岳愛護少年団の清掃活動は50年以上にわたり継続して取り組んできた。



図6 自然公園クリーンデイでの清掃活動
(2020年8月)

E.1.2 境界線

申請地域は、美瑛町域および上富良野町域の全域を本構想エリアとし、行政界を境界としている（図1参照）。

E.1.3 可視性（ビジビリティ）

2020年度までに総合案内板を美瑛駅前に1基、解説板14基を設置（2021年度に2基を設置予定）するなど、主要なサイトにおいてジオパーク構想エリアであることを示している。さらに4か所の既存観光案内看板に本構想ロゴマークを併記し、可視性の向上に努めている。

国立公園内は解説板を新たに設置することが困難であるため、十勝岳望岳台防災シェルター内へのパネル展示や、十勝岳温泉駐車場付近に解説板を設置することで、本構想としての可視性を確保するとともに、来訪者のマナー向上を呼び掛けている。

総合案内板および解説板は、日本語・英語の2か国語表記しており、今後、十勝岳ジオパーク構想ガイドや関係団体と協議し、対応言語を増やす予定である。また、QRコードからwebサイトに誘導することで多言語対応を進めていきたい。2020年4月にリニューアルしたホームページに、ジオサイトへのアクセス情報やグーグルマップで位置を掲載して、道案内を行っている。また、拠点施設、協力施設にリーフレットを設置し、案内板、解説版とともに、可視性の向上に努めている。

なお、本構想エリアの入り口への看板設置について、道路管理者と協議中であり、認定後に再度協議することとなっている。

E.1.4 施設・インフラ整備

1. 拠点施設

本地域のジオパーク活動は、テーマ「丘と火山がおりなす彩り」を展開するために「活火山十勝岳」「火砕流の丘」「泥流からの復興」の3つのストーリーを設定し（図2）、それぞれのス

トリーごとに地域の魅力を学べる施設を整備している（表1）。

表1 拠点施設

名称	用途	所在地
十勝岳火山砂防情報センター	地質・火山・防災の学習施設	美瑛町
美瑛町郷土学館 美宙	歴史・景観・生態の学習施設	美瑛町
上富良野町郷土館	歴史・災害・復興の学習施設	上富良野町

本構想の起点となる「北海道の屋根十勝岳ものがたり」は、「十勝岳火山砂防情報センター」において展開する。十勝岳火山砂防情報センターは、十勝岳の火山情報を一元管理し、住民をはじめ観光客等の避難施設としての機能を持ち、噴火の脅威と復興の歩み、砂防施設の概要を紹介する施設として開設された。本構想の拠点施設としての整備するため本協議会は、施設管理者である国土交通省北海道開発局旭川開発建設部および美瑛町と協議している。

また、残る2つのストーリー「大地に生まれた火山と共生する美しい丘のまち」を展開する美瑛町郷土学館「美宙」、「十勝岳泥流のつめ痕に北の大地を切り拓く」を展開する上富良野町郷土館とともに、地域の成立ちを理解し地域の魅力を解説できる拠点施設として、3施設が連携しながら「火山と共生するまちづくり」を進めていく。そのため、3施設間の交通アクセスやそれ

表2 協力施設

名称	郷土の歴史文化	火山災害と防災	教育研修・交流	観光情報・販売	一般利用	リーフレット	所在地
丘のまち交流館 bi.yell				○	○	○	美瑛町
四季の情報館				○	○	○	美瑛町
道の駅びえい 丘のくら	○			○	○	○	美瑛町
白金インフォメーションセンター				○	○	○	美瑛町
白金観光センター				○	○	○	美瑛町
北西の丘展望公園 観光案内所				○	○	○	美瑛町
十勝岳望岳台シェルター		○			○	○	美瑛町
国立大雪青少年交流の家		○	○		○申込	○	美瑛町
上富良野町開拓記念館	○				○	○	上富良野町
上富良野駅舎内 観光案内所				○	○	○	上富良野町
凌雲閣別館 上富山荘		○		○	○	○	上富良野町
セントラルプラザ				○	○	○	上富良野町
土の館	○	○			○	○	上富良野町
後藤純男美術館	○			○	○	○	上富良野町

ぞれのエリアの情報などを各施設が共有しながら、ジオサイトをはじめ文化サイト、生態サイトのほか、観光名所を紹介し、季節の彩りを楽しめるプログラムを提供している。

2. 協力施設

本地域では、ジオパーク活動の普及と持続可能な観光を推進する施設（表2）を、「協力施設」として位置付けている。各施設では、交流、案内、展示のほか、自然や国立公園利用に関するマナー、ルールの啓発や、美瑛・上富良野2町が共同で取り組むジオブランドの開発・販売について情報提供するなど、様々な機能を生かしながら連携していく。特に国立大雪青少年交流の家は、国立公園内に位置し、原生林や高山植物に囲まれた自然豊かな環境で、本協議会が行う防災・教育部会の研修をはじめ、多様な活動ができる施設である。

E.1.5 情報、教育、研究

1. 一般向けの情報提供

本地域の継続的な情報の提供は「Web 媒体」としてホームページのほか、Twitter、Facebook、Instagram といった SNS を活用している（表3）。ホームページは、2020年4月にリニューアルし、本構想の概要や見どころ、活動目標（ジオパークとSDGs）、イベント情報などのニュース、ジオツアーの申し込みフォームを備えている。

更に活動目標として、「農業景観」を守るため、観光客の農地への立ち入りを防止する取組み（美瑛町観光マナー110番プロジェクト）や、国立公園を守るルールとマナーの掲示、登山道の荒廃や高山植物の減少の原因となっている「し尿の排出」問題の解決のため、「大雪山国立公園携帯トイレ普及パートナー」に登録し、登山時の携帯トイレ持参の啓発に取り組んでいる。

また、「マチアルキAR」を上富良野高等学校（地域探求学習）と共同で開発した。これにより、スマートフォン等を用いてジオサイト、文化サイトの解説を現地で参照できる。

「紙媒体」として、美瑛・上富良野両町がそれぞれ地域住民に配布している広報誌に、「十勝岳ジオパーク構想通信」のタイトルで共通する記事を毎月連載し、最新情報を提供。また、事業やイベント等を開催する場合は、ポスターやチラシを作成し、エリア内外の施設や道の駅、宿泊施設でPRしている。なお、紙媒体で情報提供する際は、基本的にQRコードを入れ、ホームページの特設サイト等、関連するページへ誘導し、より詳しい情報を提供すると共に、メディアミックスによる相乗効果を目指している。

表3 ホームページの情報提供詳細

 <p>TOKACHIDAKE GEOPARK PLAN BEI-KAMIFURANO AREA https://tokachidake-geopark.jp/</p>	静的 情報	ジオパークとは	テーマやストーリー等の基本情報
		活動目標	SDGs に沿った本地域の目標
		見どころ	サイト情報
		ジオをめぐる	ストーリーに沿ったサイトめぐりをモデルコースで提示
		アクセス	交通情報等
		ダウンロード	各種資料の提供
	動的 情報	ニュース	お知らせと活動報告、ガイドコラム等
		特設サイト	フォトコンテストの募集ページ、公式グッズ販売店の案内
		SNS	facebook、Twitter(ニュースの更新に自動連携)
			Instagram(フォトコンテストと連動)
			YouTube(サイト紹介、バーチャルツアー動画の公開)

2. 看板、リーフレットの提供

これまで総合案内板1基、解説板14基を設置している(表4)。総合案内板はJR美瑛駅前に設置し、2021年度以降も地域内に順次解説板を追加していく予定である。また、ホームページやリーフレットの活用で、施設の連携やツーリズムの展開など、解説板による説明を補完している。

リーフレットは、「本協議会の理念やテーマ、組織構成」という総合的なものから、「地域の方に向けた活動報告」や、「来訪者に向けたジオサイトの紹介」など個別のテーマごとに3種類発行している。

ほかに、「十勝岳ジオパークエリアトレッキングマップ(遊歩道・散策路編)」は増刷希望が高いことから利用者に理解されていると考える。なお、ホームページ開設後に作成したリーフレットにはQRコードを掲載し、より詳しい情報をホームページから収集可能である。一方、ホームページには各種パンフレットをダウンロード可能な状態で公開する事で、各メディアを補完し、直感的に理解できるしきみを意識的に構築している。

解説板は、サインガイドラインを策定し、使用する色やフォント、キャッチコピーなどを規定している。防災情報については山岳エリアと丘陵エリアで提供すべき情報が異なるため、エリアごとに異なった内容としている。本エリアには、多数の外国人旅行客が訪れるが、現在のところ外国語の表記は英語のみとし、その他の言語(中国語、韓国語)は、板面に記載するQRコードを活用したインターネットや、補助看板を通じた多言語対応を予定している。なお、解説板の作成など、広く情報の提供にあたっては、環境省と観光・ツーリズム部会とで協議を行い、さらに、地元関係者によるモニタリングから得られた意見を反映させている。

表4 総合案内板および解説板一覧

区分	設置場所	サイト番号	サイト名
ジオサイト	上富良野町北町1丁目	11	草分の大正泥流堆積物
	上富良野町吹上	17	吹上温泉（十勝岳）
	美瑛町白金	18	白ひげの滝
	上富良野町十勝岳温泉	30	十勝岳温泉
文化サイト	美瑛町本町1丁目	201	美瑛駅（総合案内板）
	美瑛町本町1丁目	202	丘のくら
	上富良野町西1線北32号	205	十勝岳爆発記念碑の巨岩
	上富良野町吹上	206	旧白銀荘
	上富良野町西3線北28号	207	上富良野町開拓歴史広場
ビュースポット	上富良野町東1線北27号	302	日の出公園（十勝岳連峰）
	上富良野町東1線北27号	302	日の出公園（丘陵、山地）
	美瑛町字大村	303	北西の丘展望公園
	美瑛町字水沢	304	三愛の丘展望公園
	美瑛町字美馬牛	305	新栄の丘展望公園
	美瑛町白金	309	十勝岳望岳台防災シェルター
	上富良野町西6線北22号	306	千望峠（2021年設置予定）
	上富良野町西9線北34号	308	深山峠（2021年設置予定）

3. 教育プログラム

教育活動の特色

本協議会では、活火山と共生し、地域住民が郷土を愛せる地域づくりを目標に、教育活動を進めている。噴煙を上げる火山を目の当たりにして「生きている地球」を実感させ、災害遺構の見学や実験を通じて実地に火山防災を学べるプログラムを提供している。

学校教育

地域内には、小学校8校、中学校3校、高等学校2校があり、ふるさと学習や理科、地理の授業を通じて「火山と共生するまちづくり」について、体験を通して学んでいる（図7）。特にすべての小学校が何らかの形でジオパークを教育に取り入れている。

上富良野高校では、高校生が3年間かけて主体的に計画し実践する取り組み（地域探求活動）を、本協議会と協力して行っている（図8）。本構想をテーマに様々な取り組みをおこなっており、2020年度はPR動画作成、特産品開発（メロンパン作り）、社会問題調査（公衆トイレの整備状況について）などに取り組んだ。また、日頃のジオパーク学習が評価され、2021（令和3）

年度から3年間、「北海道 CLASS プロジェクト（地学協働活動推進実証事業）」の研究指定校となった。

地域の課題を解決していく取り組みを持続可能なものとするため、中村専門員が地域と学校をつなぐ「地域コーディネーター」に北海道教育委員会から委嘱され、今後生徒と地域の大人が協働した地域課題探求型の学習プログラム等について研究していく。E.5 教育活動も参照のこと。



図7 上富良野西小学校「十勝岳たんけん隊」の様子（2020年9月）



図8 上富良野高校「地域探求活動」
取り組み発表（2020年12月）

ジオパークサポーター養成講座とガイド養成講座

本協議会では、ジオパーク活動をあらゆる面でサポートする「ジオパークサポーター養成講座」を地域内外の一般向けに実施している。養成講座では、ジオパークネットワーク、地球科学（火山活動や地質など）、防災、郷土史、地域資源の活用など、ジオパーク活動に必要な知識を学ぶ。とくに、火山活動や地質については、学識顧問の廣瀬亘氏や佐藤鋭一氏、旭川地方気象台の火山防災官などの専門家を講師として、座学や現地見学の機会を設けている。サポーター養成講座を受講したもののうち、さらにリスクマネジメントやインタープリテーションなどの講座を受講し、認定試験に合格すると「ジオガイド」に認定される。

出前講座

本構想にかかわる、活動の概要や地球科学、郷土学習、防災などをテーマに、地域内の諸団体からの要望に応じて講演会や野外学習会などを開催している。2020年度は小学校7校、上富良野高等学校、十勝岳ジオくらぶ、美瑛町婦人団体連絡協議会等で講演した。

今後の課題

ジオガイドが現時点で11名とまだ少ないので、今後人材育成を進めていく必要がある。また、学校教育との連携により、子どもたちが将来に希望を持てるジオパーク教育をすすめていきたい。火山との共生を進めるためにも、教材開発や、教育プログラムの改善など、北海道大学、北海道教育大学と連携して進めていく予定である。

4. 地球科学および他の遺産に関する研究

十勝岳ジオパーク推進協議会

本構想エリア内の地形・地質およびその他の遺産について調査研究するため、地球科学分野の専門員を雇用している。2020年度から自然地理学・第四紀地質学を専門とする中村を雇用し、ジオサイトを中心に火山噴出物やその地形についての研究を、北海道大学や北海道教育大学と連携して進めている。

毎年6月および9月には、旭川地方気象台を中心に、十勝岳火山防災協議会、北海道、林野庁、警察、消防、自衛隊など関係機関とともに、十勝岳調査観測登山を実施している（図9）。立入が規制されている十勝岳の噴火口（62火口群、大正火口、振子沢噴気孔群など：図4参照）付近を調査・観察し、火山活動の状況と防災体制について関係機関と情報共有を行っている。

北海道教育大学旭川校

和田恵治教授（2019年度まで）や佐藤鋭一准教授（2020年度から）を中心に十勝岳および周辺地域をフィールドとして、火山地質学、教育学を中心に研究を進めてきた。2021年度には、本協議会との協定も視野にいれ、地域内の研究・教育の推進について協議をすすめていく。

北海道大学

地球物理学的視点による火山学研究の推進と地域の防災に関する助言を得るため2020年度より、北海道大学大学院理学研究院附属地震火山研究観測センターの青山裕教授を学識顧問として迎えることとした。本協議会は、北海道大学が所有する観測機器のメンテナンスや、研究者・学生の現地調査などの面でサポートする。

北海道立総合研究機構 産業技術環境研究本部 エネルギー・環境・地質研究所（道総研）

道総研は北海道全域の地質を調査研究している組織であり、特に廣瀬亘氏は十勝岳周辺を含む火山地質やジオパーク活動に詳しい。そこで、廣瀬氏を本協議会の学識顧問とし、ジオパーク活動や学術研究面においてサポートを得ている。

今後の課題

活火山との共生を実現するため、十勝岳の火山活動や周辺地域の生態系など研究を進める。とくに、十勝岳の20世紀以降の火山活動、融雪型火山泥流の発生メカニズムと流下・堆積過程は、国際的にアピールできる現象であり、各研究機関と連携して研究を推進する。また、波状丘陵を形成した噴火年代や周氷河作用など、既存研究に疑問のある項目についても、今後詳細な調査を進めるべきである。北海道大学や北海道教育大学とは、今後、連携を密にしたい。特に、地域内での研究・教育活動を活発化するため、研究者や学生への研究協力、資金援助など、体制を早急に整えなければならない。



図9 62火口付近での調査
(2020年6月)

表5 大雪山国立公園内の希少動物

・レッドリスト掲載種	
絶滅危惧ⅠA類（鳥類）	シマフクロウ、ミユビゲラ
絶滅危惧ⅠB類（鳥類）	オジロワシ、クマタカ、イヌワシ、チュウヒ、キンメフクロウ
絶滅危惧Ⅱ類（鳥類）	オオワシ、ハヤブサ、クマゲラ
準絶滅危惧（鳥類）	ミサゴ、オオタカ
絶滅危惧（A+B）類（昆虫）	チャマダラセセリ
絶滅危惧Ⅱ類（昆虫）	クモマベニヒカゲ、オオイチモンジ
準絶滅危惧（昆虫）	ウスバキチョウ、ダイセツタカネヒカゲ、アサヒヒョウモン、カラフトルリシジミ
準絶滅危惧（哺乳類）	エゾオコジヨ
・天然記念物	
国指定天然記念物	ウスバキチョウ、ダイセツタカネヒカゲ、アサヒヒョウモン、カラフトルリシジミ、イヌワシ、オジロワシ、オオワシ、シマフクロウ、クマゲラ
・種の保存法対象種（国内希少野生動植物種）	
オオタカ、クマタカ、オオワシ、イヌワシ、オジロワシ、ハヤブサ、シマフクロウ、ミユビゲラ	
・北海道希少野生動植物の保護に関する条例対象種（指定希少野生動植物）	
ヒメチャマダラセセリ、ウスバキチョウ、アサヒヒョウモン、ダイセツタカネヒカゲ、カラフトルリシジミ	

E.2 その他の遺産

E.2.1 自然遺産

本構想エリアのうち、十勝岳連峰山麓部には広大な森林が分布し、低標高から順に、針広混交林帯、針葉樹林帯、ダケカンバ帯、ハイマツ帯へと垂直分布がみられる。植物相の変移を観察できる針広混交林帯は世界的にもめずらしい天然林（原生林）である。ハイマツ帯より高位には、高山植物群落を形成する。また、十勝岳の火口周辺には、過去の火山活動により植物が定着しない領域がある。

北海道の動物相にはサハリン・シベリアとの共通種が多く、本州以南と大きく異なる。当地域の山岳エリアでは、植生・気候環境に適応して、エゾナキウサギ、エゾヒグマ・エゾシカなどの哺乳類、ウスバキチョウ・アサヒヒョウモンなど特有の高山蝶、クマゲラ・シマフクロウなどの希少な鳥類が生息する。大雪山国立公園管理計画書（2007(平成19)年6月）には、希少種として表5に示す動物が記載されており、当申請地域にも該当する。

本地域の自然遺産は、北海道の屋根ともいわれる火山地帯で、国の史跡名勝天然記念物「大雪山」に指定される（1971年指定）。高山植物は全国に類例のない規模で分布するほか、氷河時

代の遺存動物も有する。また、林野庁が次世代への財産として選定した「森の巨人たち百選」（健全な形で残していくべき巨樹・巨木を中心とした森林生態系）の一つに「美瑛の森の神様カツラ（2000年指定）」がある。このほか、北海道庁が2004年に指定した北海道遺産として「土の館」がある。北海道開拓が過酷な気象条件の中で進められた経緯や、土と人間の関わりの大切さを今に伝える。とくに高さ4mの巨大な土の標本展示は1926（大正15）年に起こった十勝岳噴火による泥流災害の凄さと、災害からの復興を成し遂げた歴史を感じることができる。

また、森林および生態系保全を目的として、「白樺街道沿いの林」「小松原原生林」の2か所を生態サイトに指定している。「白樺街道沿いの林」は、1926年噴火に伴う泥流で生じた裸地に、先駆樹種であるシラカンバとダケカンバによる林が形成されている（図10）。シラカンバの平均寿命は80年ほどで、近年はシラカンバの倒木があいつぎ、今後はマツ林になると予想される。泥流による植生破壊とその後の植生回復・植生遷移の過程が見られる。

「小松原原生林」には、北海道中央地域での典型的な森林形態（針広混交林）が広がり、エゾシカ、エゾヒグマ、エゾリスといった野生動物が生息する。また、約3300年前以降に噴出したグラウンド火口溶岩がこの地まで到達している。その表面には風穴が形成され、エゾナキウサギの生息や、蘚苔類が繁茂する環境となっている。

上記の希少な動植物を保全するためには、今後生態サイトの新規認定・拡大を進める必要がある。そのためにも、地元住民や学識顧問、研究機関と協力して、生態系資源の調査研究を進めていきたい。



図10 白樺街道の植生

E.2.2 文化遺産

本構想エリア内にある指定文化財として、美瑛町指定文化財「高橋北修画・美瑛開拓歴史画6点」および「旧陸軍演習場厩舎門柱」、上富良野町指定文化財「東中尋常高等小学校御真影奉置所」および「憩いの榎」、「富原地区地神及び山の神」が存在する。いずれも開拓期の歴史を伝える貴重な文化遺産である。

本構想では、火山との共生や、火山の地質・地形を利用した文化遺産を文化サイトに指定している。美瑛火砕流堆積物（美瑛軟石）の石材利用を主題とする「美瑛駅」「丘のくら」（図11）、1926年噴火（大正泥流）にかかわる「旧日新尋常小学校跡」「十勝岳爆発記念碑の巨石」「上富良野町開拓歴史広場」、大規模火砕流の堆積地形にかかわる「かみふらのラベンダー発祥の地碑」がそれに相当する。

また十勝岳は、物理学者・中谷宇吉郎が雪の結晶の研究のためにたびたび訪れた場所である。中谷が研究



図11 美瑛火砕流堆積物の石材利用の例：「丘のくら」

で利用した「旧白銀荘」を文化サイトとして指定することで、近代物理学発展の舞台となった建造物の保全にあたっている。

本構想エリア内には、先住民族であるアイヌが定住した痕跡や伝承は少ない。しかし、彼らは狩猟や祭祀の目的で当地をしばしば訪れたと考えられる。その事実を伝承する文化サイト「シャマイクルチセ遺跡」も、当申請地域の貴重な文化遺産といえる。

E.2.3 無形遺産

近年増加している都市・生活型公害化した悪臭問題を解決するため、環境省では「かおり風景100選」を選定し、「かおり環境」という新しい考え方により良好なかおりとその源となる自然や文化を保全・創出しようとする地域の取組みを支援している。上富良野町の町花でもあるラベンダーは、「かおり風景100選・ふらののラベンダー」に選定されている（2001年選定：富良野市、上富良野町、中富良野町、南富良野町）。

本構想地域に多数存在するアイヌ語地名は、北海道内他地域のものとともに、「北海道遺産・アイヌ語地名」に選定されている（2019年、北海道選定）。アイヌ語地名の多くは、地形や地理的位置に関連しており、「アイヌ文様」「アイヌ口承文芸」（いずれも北海道遺産、2019年）と合わせて、アイヌ文化や自然観を理解する重要な無形文化遺産である。

本構想に伝わる祭り文化は、いずれも火山災害による犠牲者の慰霊と災害からの復興、火山との共生を象徴している。地域の祭りとして盛大なものに、「那智・美瑛火祭」「かみふらの花と炎の四季彩まつり（2003年までは「十勝岳火まつり）」」「北の大文字」がある。いずれも「火祭り」の要素を持つ。火はすなわち活火山十勝岳を象徴する。美瑛町的那智・美瑛火祭（図12）は1988年の十勝岳噴火を契機に、美瑛神社で熾した忌火を十勝岳に供え、その火を松明に灯して神社に奉納し、火山活動の沈静化とまちの活性化を祈願する目的で始まった。祭の名は和歌山県那智勝浦町から美瑛町に入植した縁で、熊野那智大社の「那智の火祭」から許しを受け冠したものである。上富良野町の北の大文字（図13）は、1926年の泥流災害を偲び、復興をたたえるとともに、活火山「十勝岳」の安静と地域の発展を願う行事である。



図12 「那智・美瑛火祭」の様子
(2019年7月24日)



図13 「北の大文字」の様子
(2020年12月31日)

<https://youtu.be/ZAleK4PXh8>

また、地域内には表6に示す自然災害伝承碑が存在しており、古くから災害からの復興、火山との共生が意識されていたことを物語っている。

前記の通り、申請地域内にはアイヌ民族が定住した痕跡はないが、「フラヌイ（臭気のある場所の意。富良野の語源）」や「ピイエ（油の意。美瑛の語源）」など、多数のアイヌ語地名が存在する。また、アイヌ民族との共存を主張したことで知られる松浦武四郎が、1858（安政5）年にこの地を訪れた。このような歴史を伝承するため、「トカチルウチシを歩く会」（山谷圭司代表。2008年設立）の活動を本協議会がサポートしている。2020（令和2）年10月には「松浦武四郎の足跡とアイヌ語地名を辿るツアー」を商品化した。

申請地域の文化遺産および無形遺産は、地域における自然・火山との共生を示す貴重な地域資源であり、ガイド組織や地元郷土史家などと協議を進め、保全・活用を進める予定である。

表6 自然災害伝承碑の一覧

場所	名称	災害の種類	説明
美瑛町十勝岳望岳台	十勝岳爆発記念	火山噴火 (1962/6/29)	十勝岳爆発により、宿泊していた5名が火山弾の直撃を受けて犠牲となった。
美瑛町十勝岳望岳台	大正大爆発丸谷温泉遭難者慰霊碑	火山噴火・泥流 (1926/5/24)	大正15年(1926)5月24日、十勝岳大爆発に遭遇し、3名が山津波に巻き込まれ死亡。温泉施設潰滅。
上富良野町西2線北31号	遭難記念碑	火山噴火・泥流 (1926/5/24)	この災害で100余の人命を喪失し巨万の財物を滅尽。碑の台石は泥流による転石をそのまま使用。
上富良野町西6線北28号	追善記念碑	火山噴火・泥流 (1926/5/24)	泥流に呑まれ犠牲となった馬25頭、牛3頭の供養のため建立された。
上富良野町中町3丁目（大雄寺）	新西国三十三所観世音菩薩	火山噴火・泥流 (1926/5/24)	大雄寺周辺にも泥流が押し寄せた。犠牲者の追善供養のため、三十三所観世音菩薩が建立された。
上富良野町西3線北28号	「泥流地帯」三浦綾子文学碑	火山噴火・泥流 (1926/5/24)	惨事を風化させず、復興を成し遂げた先人の偉業を称え、被災の地に建立された。
上富良野町栄町3丁目（専誠寺）	十勝岳爆発惨死者碑	火山噴火・泥流 (1926/5/24)	犠牲になった144名の慰霊のため役場裏庭に建立。数度の移転等を経て1988年現在地に安置。
上富良野町西町1丁目（明憲寺）	遭難記念碑	火山噴火・泥流 (1926/5/24)	碑の台座正面に銅版が埋め込まれ、遭難死者144名の姓名が刻まれている。
上富良野町本町2丁目（聞信寺）	十勝岳爆発横死者血縁塔	火山噴火・泥流 (1926/5/24)	無縁仏12名のための血縁塔として建立。碑の裏面には法名と推定年齢が刻まれている。

E.2.4 気候変動と自然災害への関わり

当申請地域では、波状丘陵のもととなる大規模火砕流堆積物や、大雪山～十勝岳連峰が形成されてからおよそ 100 万年の時間が経過しており、少なくとも 12 回の氷期―間氷期サイクルを経験している。よって、波状丘陵のなだらかな斜面や、山岳エリアに分布する周氷河地形など、氷期の寒冷環境を反映した地形が随所にみられる。本ジオパーク構想では、気候変動と地形・生態系の関係を観察できる。

地球規模の気温上昇は地形環境への影響をもたらし、農業生産や生態系への影響、ヒトの生活へも影響が及ぶ。近年、当地域においても豪雨や台風による農業被害、建造物被害が発生している（例えば、2016（平成 28）年 7 月の豪雨災害、2018（平成 30）年 8 月の台風）。いまのところ、大規模な地形改変やジオサイトへの影響は生じていないが、温暖化の進行によっては気象災害・土砂災害の激化も想定される。とくに、山岳エリアに存在するといわれる永久凍土に与える地球温暖化の影響が懸念される。ジオサイトの管理・活用を進めることは、これらの地形に対する災害の影響を監視することにもなり、地球温暖化を評価するうえでも不可欠である。

美瑛町では、環境の保全をハード・ソフトの両面で積極的に取組みを進めている。地球温暖化対策の推進に関する法律の施行後、2003 年度に「新エネルギービジョン」を策定し、太陽光、太陽熱、水力、風力、バイオマスなどの自然エネルギーを活かしたまちづくりを検討し、公共施設の温室効果ガス削減を図るため「熱源システムや木質バイオマスエネルギーの利用、土壌蓄積型熱換気システム」を導入してきた。また、観光繁忙期における周遊バスの運行や電気自動車の導入、徒歩・自転車の奨励のほか、水道水の節水、ゴミ削減・リサイクルの推進をはじめ、循環型社会の形成のため汚泥廃棄物処理から肥料化を実践している。上富良野町においても、上富良野市街から十勝岳温泉・吹上温泉までの町営バスを運行している。

今後は、本協議会および両町役場を中心に、来訪者にも温室効果ガスの排出削減が理解される方策の検討が急務となるだろう。

今後の課題

山岳エリアに分布する高山地形、周氷河地形については、アクセスが容易でないこともあり、これまで活用が進んでいなかった。保護・保全の方策や、活用方法など、学識顧問や研究機関との議論を進める必要がある。また、本構想エリアの農地は急傾斜地が多いため、豪雨による土砂流出を防止する効果的な工法を数年にわたり試行してきた経緯から、火山災害だけでなく、気象災害・土砂災害にも強い地域づくりを模索しなければならない。

E.3 管理運営

1. 運営・事業計画

本協議会の基本計画に示すとおりで、地域住民による「ボトムアップ型」で戦略的に構築している。基本計画は、美瑛町・上富良野町のまちづくりを示す上位計画である総合計画や「まち・ひと・しごと創生法」に基づく市町村戦略と整合性を図り、2024（令和 6）年までの 4 年間の重点施策及び戦略プランを計画している。

また、2017（平成 29）年の加入認定見送り後は、指摘事項の改善に取組み、事務局体制を 2019（平成 31）年 4 月から美瑛町に集約し、一体感のある活動を推進している。専門部会の活

動についても、部会が主体となって、部会ごとの事業計画及び予算を作成し、部会の代表者で構成する運営委員会で審議し、総会をもって決定している。

2. 運営組織

防災力強化と地域資源の保全・活用、地域の持続的な発展を促すため、美瑛町および上富良野町、国の出先機関、教育機関、観光団体、商工農業団体、地域活動団体からなる「十勝岳山麓ジオパーク推進協議会」を2015（平成27）年4月14日に設立、2017（平成29）年4月には名称

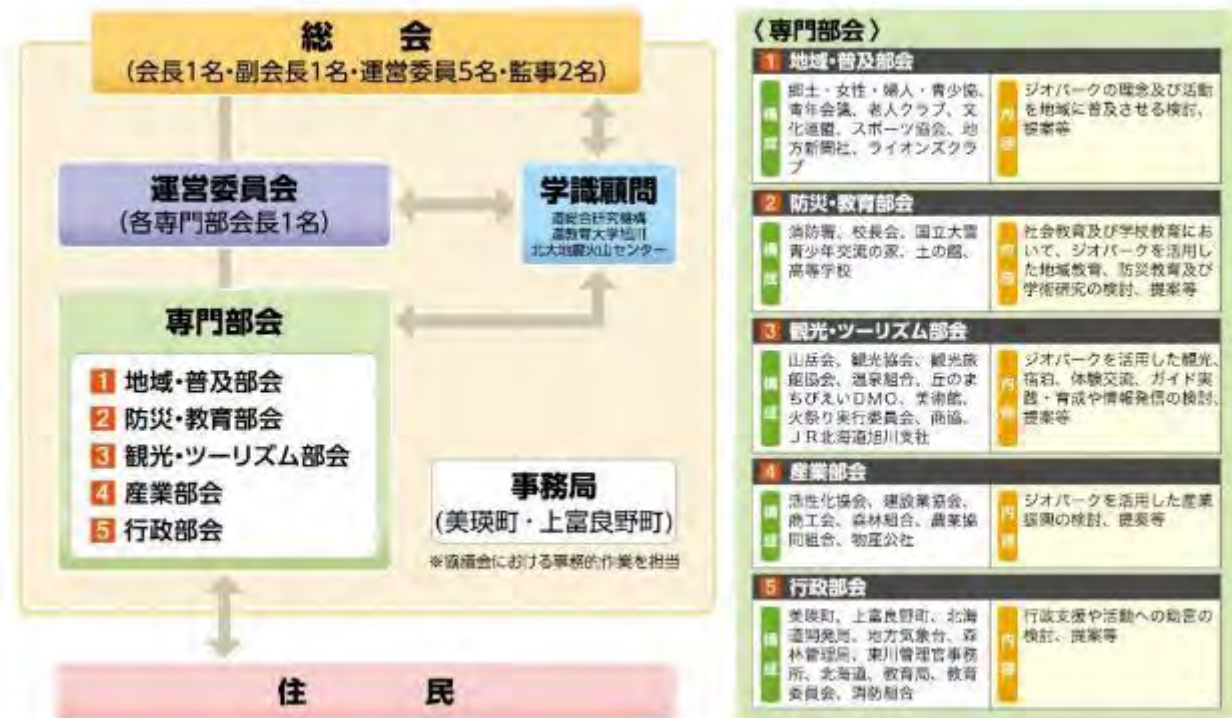


図14 十勝岳ジオパーク推進協議会における組織図

を「十勝岳ジオパーク推進協議会」に変更した。

本協議会における意思決定は総会において行う（図14）。定例総会を年1回開催し、臨時総会を必要に応じて開催する。各事業は、専門部会が責任を持ち、その調整は事務局が行う。専門部会（行政、防災・教育、産業、観光・ツーリズム、地域・普及の5部会）は、各団体の長が構成員となっており、構成メンバーを表7に示す。各部会は、定期的に部会会議を開き、活動計画、実施事業について協議し、実行している。

また、ガイドやツーリズム、オリジナルグッズ開発など、より具体的な作業を行うにあたり、現場の肌感覚で実行できるメンバーを各構成団体から募り、作業部会として、各課題の検討を行い、ツアーの企画や実施、商品開発や販売などを実行している。

事務局は、本協議会の運営およびジオパーク活動全体の管理、部会のサポートを行う。現在、美瑛町および上富良野町によって雇用された6名の事務局員を配置している（後述）。

表7 専門部会の構成メンバー（2021年4月7日現在）

部会	機関名・団体名	代表者	
行政 部会	美瑛町	町長	角和 浩幸
	上富良野町	町長	斉藤 繁
	国土交通省北海道開発局旭川開発建設部	部長	武井 一郎
	国土交通省気象庁旭川地方气象台	台長	植田 亨
	農林水産省林野庁北海道森林管理局 上川中部森林管理署	署長	近藤 昌幸
	農林水産省林野庁北海道森林管理局 上川南部森林管理署	署長	北浦 眞吾
	環境省北海道地方環境事務所大雪山国立公 園管理官事務所東川管理官事務所	国立公園管理官	齋藤 明光
	北海道上川総合振興局	局長	佐藤 昌彦
	北海道教育庁上川教育局	局長	河野 秀平
	美瑛町教育委員会	教育長	千葉 茂美
	上富良野町教育委員会	教育長	服部 久和
	大雪消防組合	消防長	東本 浩昭
	富良野広域連合消防本部	消防長	安井 盟
防災・ 教育部会	富良野広域連合 上富良野消防署	署長	谷 佳修
	上富良野町校長会	会長	今村 雅之
	独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大雪青少年交流の家	所長	藤井 玄
	大雪消防組合美瑛消防署	署長	大庭 徳正
	「土とトラクターの博物館」土の館	館長	田村 政行
	美瑛町校長会	会長	鈴木 薫
	北海道上富良野高等学校	校長	辻 芳恵
	北海道美瑛高等学校	校長	升田 重樹
産業 部会	一般財団法人 丘のまちびえい活性化協会	代表理事	角和 浩幸
	上富良野町建設業協会	会長	北川 昭雄
	上富良野町商工会	会長	鎌田 孝徳
	美瑛町建設業協会	会長	濱塚 努
	美瑛町商工会	会長	瀧田 勝彦
	美瑛町森林組合	代表理事組合長	谷 秀雄
	美瑛町農業協同組合	代表理事組合長	熊谷 留夫

	有限会社 美瑛物産公社	代表取締役	瀧田 勝彦
	ふらの農業協同組合北エリア	代表理事組合長	植崎 博行
観光・ツーリズム 部会	上富良野町十勝岳山岳会	会長	井上 文雄
	一般社団法人 かみふらの十勝岳観光協会	会長	青野 範子
	かみふらの十勝岳観光旅館協会	会長	荒生 博一
	丘のまちびえいDMO	CEO	後路 宜伸
	後藤純男美術館	館長	後藤 洋子
	那智・美瑛火祭り実行委員会	委員長	広瀬 孝司
	美瑛山岳会	会長	三浦 陽一
	びえい白金温泉観光組合	組合長	西海 正博
	一般社団法人 美瑛町観光協会	会長	後路 宜伸
	美瑛町商工業協同組合	理事長	花輪 和雄
	北海道旅客鉄道株式会社 旭川支社	営業次長	西村 貴文
地域・普及部会	上富良野町郷土をさぐる会	会長	中村 有秀
	上富良野町女性連絡協議会	会長	村上 孝子
	上富良野町青少年団体協議会	会長	杉本 貴史
	上富良野町スポーツ協会	会長	北 孝吉
	上富良野町文化連盟	会長	和田 昭彦
	上富良野町老人クラブ連合会	会長	三島 功士
	上富良野ライオンズクラブ	会長	加藤 祐一
	びえい新聞	代表	興梠 勝也
	美瑛町郷土史料保存会	代表	菅野 勝見
	美瑛町青年会議	会長	瀧田 竜士
	美瑛町婦人団体連絡協議会	会長	嵯城 幸子
美瑛町老人クラブ連合会	会長	小倉 孝一	
学識顧問	地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 環境・地質研究本部地質研究所	主査	廣瀬 亘 (2014.4.1.~)
	北海道教育大学旭川校 地学教室(火山学・岩石学研究室)	准教授	佐藤 鋭一 (2020.4.1.~)
	北海道大学大学院理学研究院 附属地震火山研究観測センター	教授	青山 裕 (2021.3.1.~)

学識顧問は3名で、本地域における地形・地質などの学術的な価値の整理のほか、多様な専門分野との連携を深めながらジオパーク活動をサポートしている。また、学識顧問および専門員よりなる十勝岳ジオパーク構想学術会議（以下「学術会議」という）によりジオサイトの登録・抹消に関する議論・審査・決定を行うほか、ジオガイドの養成講座や学校教育の指導を実施している。

3. 財政計画

予算は、表8に示した通りである。この金額は、事業費のみであり、事務局運営に係る人件費や解説板等のインフラに要する予算は構成町において別途計上している。今後の財政計画では拠点施設の整備費をはじめ、ジオツーリズムの展開に必要な予算を事業計画に基づき予定している。また、本構想の普及のため、地域内における統一ブランド化の推進と収益金の一部を環境保全や地域振興活動に貢献する資金として活用するなど、独自の収益事業を進めている。解説板等の詳細については基本計画を作成し、それに基づいて進めていく。

表8 予算計画

年度		予算額
2015（平成27）年度	実績	730万円
2016（平成28）年度	実績	1,315万円
2017（平成29）年度	実績	1,105万円
2018（平成30）年度	実績	577万円
2019（平成31）年度	実績	872万円
2020（令和2）年度	実績	424万円
2021（令和3）年度	計画	1,154万円
2022（令和4）年度	計画	4,600万円
2023（令和5）年度	計画	1,480万円
2024（令和6）年度	計画	1,480万円

4. スタッフに関する事項

本協議会は、6名の常勤職員（うち2名は兼務）を事務員として配置している。このほか、2020（令和2）年度より本協議会の新規事業である商品開発部門、旅行企画部門のアドバイザー

表9 十勝岳ジオパーク推進協議会スタッフ一覧

No.	名前	雇用	任務	専門	%時間	性別
1	宮崎敏行	常勤	事務局責任者	行政一般職	100%	男
2	村上弘記	常勤	事務局	行政一般職	100%	男
3	中村有吾	常勤	事務局次長 専門員	自然地理学・第四紀地質学	100%	男
4	山中潤一	常勤（地域おこし協力隊）	専門員	観光開発・情報戦略	100%	男
5	荒明慎久	常勤（兼務）	事務局	行政一般職、学芸員	20%	男
6	進 梨夏	常勤（兼務）	事務局	行政一般職	20%	女
7	梶 由貴	随時	物産公社職員	商品開発部門アドバイザー	5%	女
8	岩佐高子	随時	観光協会職員	旅行企画部門アドバイザー	5%	女
9	青野範子	随時	旅館役員	ガイドの会代表、ジオくらぶ代表	5%	女
10	國枝孝行	随時	ジオガイド	ジオくらぶ事務局	5%	男

を構成団体の中から任命した。また、本協議会の活動を支える「十勝岳ジオくらぶ」は、十勝岳ジオサポーターの養成をはじめ、地域イベントに参加して独自に普及活動に取り組むなど、まさに地域活動の原点として連携しながら活動を広げている。なお、ボランティアスタッフを含めた職員数に占める女性の割合は40%となっている。

5. 管理・運営に関する課題

現在のところ、本構想を運営する上でスタッフ人数は最小限を確保しており、通常の活動は支障がない。しかし、これからジオパーク認定を受け、ジオツアーをはじめとするジオパーク活動を本格的に運営する上で、十分な人員がいるとはいいがたい。両町役場における担当者の増員や、協議会での直接雇用など、今後の議論が必要である。また、スタッフのジェンダーバランスもまだ不均衡であり、改善していかなければならない。

前述のとおり本構想は、専門部会の運営と「十勝岳ジオくらぶ」の活動を通してボトムアップ体制を実現している。また、COVID19対策のため2020年度中止となった「ジオカフェ」（2016年より開催）を、できるだけ早い時期に再開することで、地域住民との連携を強化していきたい。

E.4 重複（オーバーラッピング）

ユネスコサイトとの重複

本地域には、世界遺産などのユネスコサイトは存在しない。

国立公園との重複

本地域の一部は、1934（昭和9）年に指定された日本で最も広い国立公園である大雪山国立公園（面積2268 km²：図1および別添書類の地図）と重複する。重複域の面積は約272 km²で、申請地域の約3割の面積を占める。十勝岳から大雪山に連なる主稜線が国立公園内にあることから、山岳エリアにあるジオサイトは自然公園法によって保護される。

特別天然記念物

標高およそ1,300m以上のエリア（図1および別添書類の地図）は文化財保護法による特別天然記念物に指定（1971年）されている（面積306 km²）。重複域は約111 km²で、これにより11のジオサイトが文化財保護法で保護される。

日本遺産

2018（平成30）年には日本遺産「カムイと共に生きる上川アイヌ」が認定された。そのストーリーのひとつとして「神々の遊ぶ庭“カムイミントラ”大雪山」（1994 km²。本構想との重複域は約50 km²）があり、十勝岳もその構成文化財となった。よって、十勝岳とアイヌ文化を関連づけたツーリズムが期待できる。

「日本で最も美しい村」連合

美瑛町は、「日本で最も美しい村」連合に加盟している。「日本で最も美しい村」は、生活の営みにより形成された景観・環境や地域の伝統文化を守り活用すること、地域資源の保護と地域経済の発展に寄与することを目的としている。このように、ジオパークと共通の理念を持つことから、今後ジオパーク活動を進めるうえでの相乗効果が期待できる。

E.5 教育活動

当申請地域がジオパークを目指す目的は、活火山と共生し、住み続けることのできる地域をつくりあげることである。若い世代はもちろん、すべての地域住民が地域の特性を理解し、郷土に愛着を持ち、この地に住み続けたいと思えるようになることが、持続可能な地域の発展に寄与する。そのために、地球科学・環境科学をもととした郷土教育を、小学生から一般住民までの広い世代を対象に、学校教育・社会教育の両面でとりくんでいる。

こうした教育活動を進めるために、国立青少年交流の家や地域の学校長などをメンバーとする防災・教育部会を2015年4月に立ち上げた。防災・教育部会で協議を行い、地域の校長会の理解を得て、小中学校・高等学校の授業にジオパーク学習を取り入れている。申請地域を構成する美瑛町・上富良野町それぞれに、郷土学習と防災学習が一体となったプログラムがあり、国土交通省北海道開発局旭川開発建設部、北海道上川総合振興局旭川建設管理部、北海道教育大学旭川校、教育委員会、および本協議会が協力して進めている。

2018（平成30）年からは、エリア内の児童の自主学習と、本構想の普及推進を家庭から進めるため「夏休み自由研究作品コンクール」を開催している。2020（令和2）年は、新型コロナウイルス感染症対策のため小学校の夏休み期間が短く、自由研究の実施も任意となっていたにもかかわらず、18作品の出品があった。



図15 美瑛東小学校での「美瑛ふるさと学習」（2020年9月）



図16 夏休み自由研究作品コンクールの審査、作品例（2019年度および2020）

そのほか、社会教育の面からは、大雪青少年交流の家との連携事業や、教育イベント等でのジオパーク実験（火山噴火実験）の実演など、様々な機会と通じてジオパーク教育、防災教育に取り組んでいる。一般対象向けの教育プログラムや出前講座、ジオパークサポーターやジオガイドの養成講座については、E.1.5.「3. 教育プログラム」を参照されたい。

教育プロジェクト事例

本申請地域では、表10のとおりテーマ・目標を掲げて「ふるさと学習」に取り組んでいる。この学習は、既に教育課程に織り込まれており、本協議会がゲストティーチャーとして関わる前

後の学年で予習となる分野、振り返りとなる分野で構成され、毎年度、実施前後に学校、教育委員会と課題を調査検討し、改善しながら取り組んでいる。

表 10 十勝岳ジオパーク構想における学校教育

学校	学年	テーマ	内容・目標	関係機関・団体
美瑛町 全小学校	小3	丘のまち美瑛 の景観	高齢者等との異世代交流による植栽を通して、景観をつくり、守り続けることを理解する。	老人クラブ連合 等
美瑛町 全小学校	小4	十勝岳と生き る	十勝岳の火山活動や防災について学び、土地の成り立ちを知り、火山と共生することの方法や大切さを理解する。	北海道開発局旭 川開発建設部・ 旭川河川事務所
美瑛町 全小学校	小5	十勝岳が作る 美瑛	地域の成り立ちをジオパークの視点（実験や解説）を通して学び、地域資源を再確認するなど郷土愛を育む。	十勝岳ジオパー ク推進協議会
美瑛町 全小学校	小6	地域の中の自 分	これまでのふるさと学習を通して、地域の資源について考え、それらを保全や活用・情報発信することで郷土愛を育む。	各小学校
美瑛町 全中学校	中1	災害から命を 守る	十勝岳噴火のメカニズムや噴出物の特質を理解し、「どこに、どんなとき避難するのか、自助、共助、公助」を学ぶ。	北海道開発局旭 川開発建設部・ 旭川河川事務所
美瑛町	20歳	二十歳のつど い	小学、中学のふるさと学習で学んだことが、いまなお活かされているか、改めて再確認する機会の場を提供する。	北海道開発局旭 川開発建設部・ 旭川河川事務所
上富良野町 全小学校		地域の成り立 ち	地域の成り立ちと本構想を使った地域づくりを副読本にそって学習	十勝岳ジオパー ク推進協議会
上富良野町 全小学校	小4	十勝岳と生き る	富良野川の砂防施設見学および火山防災学習	北海道上川総合 振興局旭川建設 管理部
上富良野町 西小学校	小3	十勝岳と生き る	「十勝岳たんけん隊」として活火山についての野外学習	十勝岳ジオパー ク推進協議会
上富良野町 東中小学校	全学 年	十勝岳と生き る	本構想についての講演と野外学習	十勝岳ジオパー ク推進協議会
上富良野町 中学校	中1	十勝岳と生き る	1926年の十勝岳噴火（大正泥流）について研究・総合学習	十勝岳ジオパー ク推進協議会
上富良野 高等学校	全学 年	地域探求「上 富良野を学 ぶ」	野外でのフィールドワークをはじめとする地域探求活動を進めるうえで、本構想をテーマに様々な取り組みをおこなう。	十勝岳ジオパー ク推進協議会
上富良野 高等学校	高1 高3	地理（高1） 地学（高3）	地理や地学を学ぶ上で必要なフィールドワークの題材として、本構想のテーマやジオサイトを活用する。	十勝岳ジオパー ク推進協議会

E.6 ジオツーリズム

ジオガイド誕生までの経過

ジオガイドが登録される以前は、上富良野十勝岳山岳会や教育委員会が行うツアー（別添書類6：ジオツアーの実績一覧表参照）を本協議会と協力、共催し、本地域におけるジオツーリズムのあり方について検討してきた。

また、2016（平成28）年12月には、より詳細な検討をするため、部会の中でガイド・ツーリズム作業部会を立ち上げた。本作業部会は、美瑛町観光協会とかみふらの十勝岳観光協会が主体となり、自然体験や観光名所の紹介などこれまで先導してきた観光ガイドの領域に加え、大地に広がる生態系の中で私たちが「生活し、文化を築き、歴史をつくる」ことを理解し、さらに地域の付加価値を高められるジオガイドの育成が検討された。

2017（平成29）年10月より本協議会が主催して、ジオパークサポーターおよびガイド養成講座をスタートさせた。地形・地質、文化・歴史、生態系といった専門知識だけでなく、ガイドツアーにおけるリスクマネジメントなど、実際のガイド活動において不可欠な知識を座学とフィールドワークで学び、最終的に筆記および面接試験に合格したものを、ジオガイドとして認定することとした。その後、2019（平成31）年度に7名、2020（令和2）年度に4名のジオガイドが誕生した。2020（令和2）年度には、ジオガイドによるツーリズムの展開を目的に「十勝岳ジオパーク構想ガイドの会」を設立し、主体的にガイド活動に取り組んでいる。

モニターツアーの実施

ジオガイドが誕生する前には、作業部会での検討結果を踏まえ、本地域の交流閑散期である秋～冬にかけて波状丘陵の丘と冬山をベースとしたアクティビティを楽しみながら火山と共生する地域を体験するモニターツアーを実施した。ツアー概要は次のとおり。

表 11 モニターツアー概要

開催日	ツアー名	内容
2018年9月24日	紅葉と火山を楽しむ	紅葉の秋の景観を眺望しながら地域の成り立ちを学ぶヌッカクシ火口トレッキングツアー
2018年11月3日	晩秋の美瑛を楽しむ	雪化粧した十勝岳連峰を眺望しながらジオサイトと十勝岳山麓の原生林で地域の成り立ちと噴火後の自然の回復を実感できるツアー
2019年3月21日	冬の安政火口を楽しむ	白銀の世界、標高1280mからヌッカクシ火口までのスノーシューを体験するツアー。「噴煙レストラン」など地の利を生かした行程が好評
2019年10月20日	松浦武四郎の足跡とアイヌ語地名を巡るツアー	北海道を命名した探検家「松浦武四郎」が、現在の富良野岳付近を十勝地方に山越えをしたルートを辿り、ルート上にあるアイヌ語地名で地形的特徴を想像するツアー。旅行事業社と連携・開発したツアー商品。

現状と成果

1. ジオガイド、サポーターの養成講座による人材育成

本地域では、ガイドはインタープリターとしての役割を持つべきであると考えており、「私たちの目指すガイド像 2015 in 霧島」に基づいて、独自の「目指すべきジオガイドについて」をまとめ、ガイド養成をすすめている。2016（平成 28）年度から、観光・ツーリズム部会では、当地域のジオガイドとして「必要なスキル」と「伝えるべきこと」を整理し、それに基づくガイド養成講座を行い、判明した問題点を洗いだした。

町内でのイベント・PR 活動への協力やガイド活動などを行うことにより、訪れた観光客や町民への普及啓発を行う「ジオパークサポーター」と、観光客へのガイド活動の中心に立ち、ジオパークの各種大会における取り組み発表といった本構想の顔としての活動を行う「ジオガイド」の 2 つの資格の認定制度を整備した。

2. ジオガイドの企画運営によるモニターツアーの実施

ジオガイドが主体となって、本構想の 3 つのストーリーをもとに表 12 の 6 コースを企画、設定した。この 6 つのツアーコースは 2020（令和 2）年度より本構想の web サイトで公表してきたが、COVID-19 対策のため一般募集までは至っていない。

表 12 ツアーコース

(1) 十勝岳ものがたり	
A コース	十勝岳望岳台周辺をめぐる、火山噴火のつめ跡をめぐる
B コース	ヌッカクシ火口周辺の噴煙を間近で体験する
(2) 火山と共生する美しい丘	
C コース	美瑛の丘をめぐる、火山と共生する農村風景を眺望する
D コース	上富良野の丘エリア
(3) 泥流地帯を切り拓く	
E コース	上富良野の災害と復興を三浦文学でめぐる
F コース	十勝岳山麓の森をめぐる、火山と共生する動植物を探勝する

そこで、ガイドの会が主体となって「モニターツアー」を企画し、「十勝岳ジオくらぶ」のメンバーを中心とした地域住民を対象にツアーを実施した。

2021（令和 3）年 2 月 20 日に「白い丘陵 江花の森スノーシューツアー」と 2021（令和 3）年 3 月 20 日「美瑛の森と青い川スノーシューツアー」を実施した。今後のために参加者からアンケートにより意見を収集するなど、ガイドのスキルアップにもつながるツアーとなった。

また、ジオガイドによる散策コースの開発にも取り組んでいる。拠点施設である、十勝岳火山砂防情報センター周辺の森をスノーシューで散策し、さらに付加価値のあるコースとなるようガイドの会で協議を進めていく。



図 17 ジオガイド主催のモニターツアーの様子
左：美瑛町（2020年8月）、右：上富良野町（2021年2月）

3. 民間によるジオツアーの取り組み

ジオガイド、サポーター養成講座を受講し、ジオパークをツアーに活かしている民間企業が多くあり、独自のジオツーリズムを展開し、本地域の魅力を広めている（表13）。

表 13 民間によるジオツアーの概要

ツアー名	内容	企業名
美瑛・パッチワークの丘ウォーク 白金原生林フォレストウォーク ミニミニ十勝岳トレッキング 外	従来のツアーに丘の成り立ちなどの解説を取り入れ、付加価値をつけてツアーを実施。	丘のまちびえい DMO
ヌッカクシ火口ツアー (スノーシューツアー含む) 法華の滝スノーシューツアー ※冬季のみ	十勝岳連峰の成り立ちやジオサイトを解説しながら、ヌッカクシ火口、法華の滝をめぐるトレッキング、スノーシューツアー	十勝岳温泉 湯元 凌雲閣
十勝岳温泉ミニトレッキング& 溶岩ヨガ	ヌッカクシ火口までのミニトレッキング&噴気が上がるヌッカクシ火口でのヨガ体験	旅ヨガ

ジオツーリズムの課題と展望

2019（平成31）年度に本協議会初のジオガイドが誕生し、ガイドの組織化やモニターツアーを実施するなど、来るべき時期に向けて順調に準備を進めている。

さらなるガイド養成に努める一方、質の高いガイドの育成には一定の時間を要する。

一方で、本地域を訪れる観光客（インバウンド含む）は年々増加しており、昨今の日帰り観光バスにおいては、バスガイドが率先して農地侵入を促している事例（いわゆるオーバーツーリズム（観光公害））もあることから、観光協会をはじめ、関係団体と連携し地域資源である「丘」を守る取り組みを強力に進めていく。



図 18 美瑛町観光マナー110番プロジェクトによる、農地への立ち入りを防止するための看板。

アドベンチャーツーリズムの展開

2021 ワールドサミットに合わせた展開を想定し、民間事業者や地域の観光協会と連携し、2020（令和2）年10月に「松浦武四郎の足跡とアイヌ語地名を辿るツアー」を試行した。

今後に向けた事業は未定であるが、本地域をより良く知り、地域住民と深く接する手段として、自然や文化を取り入れながら地域経済への貢献を実現する新しい旅のスタイル「アドベンチャーツーリズム」への展開は、本地域への来訪者拡大に大いに寄与すると考える。

E.7 持続可能な開発とパートナーシップ

E.7.1 持続可能な開発に関する方針

1. 持続可能な開発

本地域は、十勝岳の火山活動によって生まれた大地が、自然と人の営みによって美しい丘陵へと成長した。そして火山は貴重な地域資源を創造してくれる一方で、生命財産を奪う大きな災害をもたらしてきた。この地域の開拓と災害復興の歴史が豊かな文化を育み、多様な農産物を生み出した。こうした背景を踏まえながら、住民が主体となって住民と企業・団体とのパートナーシップにより、地域資源の魅力を守り、広く継承し、将来にわたって誇りある地域を作っていくことで持続可能な開発を目指していく。

2. 開発政策

本地域では、農業と観光業で経済が支えられ、その中で特に台地部の美しい景観が維持されてきた。このため、国内外からの旅行客が増加し、丘陵や農地の踏み荒らしなどの被害が出ている。山岳地帯では、高山環境の悪化が懸念されている。これらの問題解決のために、ジオツーリズムの進展を中心に据え、地域資源の保全と経済発展を目指すモデルを構築したい。

3. 申請地におけるプロジェクト（ブランド化の推進）

具体例の1つとして、十勝岳ジオパーク構想公式グッズを、地域内の12店舗（うち1店舗は通販）で販売している（図19）。従来本地域のお土産と言えば、美瑛地域では景勝地「青い池」、上富良野地域では「ラベンダー」に関するものが中心であった。そこで、両地域に共通する「十勝岳連峰」に焦点を当て、本構想そのものの名称でもある「十勝岳」をフィーチャーしたグッズを作成した。2020年度は、Tシャツ、フェイスタオル、トートバッグを開発し、販売したが、いずれも登山客にも満足してもらえるよう、良質かつ耐久性の高さを意識し、展開している。このようなお土産やグッズを美瑛町、上富良野町の両地域が共同して製作する事は初めてであり、ジオパーク認定に向けた活動をきっかけに両エリア共通のブランドを醸成し、集客に繋がりたい。なお、収益の一部は地域で活動する方や団体への寄付も検討しており、多くの方が中長期的に活動できるサイクルが維持できる事も意識して協力体制を整えていきたい。

また、本地域では丘陵地帯で採れた野菜を加工し販売している店がある（図20）。現状では、「自然豊かな丘で取れた野菜」などの説明にとどまっているが、より具体的に野菜のおいしさが丘陵の土壌や地形と深く関連していることなど解説することで、ブランド化と共に組織化を進め、販売網の強化を支援していきたい。



図19 白金温泉湯元ホテル売店



図20 JA美瑛選果

4. マーケティング戦略

本地域では、山岳・自然ガイドやサイクリングガイド、写真ガイドは顕在しており各種ツアーを開催している。一方、ジオツーリズムに特化したガイドを2019（平成31）年度に7名、2020（令和2）年度に4名認定した。コロナ禍にあることを考慮して、バーチャルツアーや人数を制限したミニツアーを開催した。

今後も更なるジオツアーの展開を進めると共に、丘のまちびえいDMOや上富良野十勝岳山岳会、観光協会、教育委員会が行うツアーにジオの要素をスパイス的に追加してもらうため、積極的に協力、共催し、顕在化を目指していきたい。

更にジオガイドの養成も本協議会が開催する講座に留まらず、丘のまちびえいDMOが開催するインタープリテーションガイド認定プログラムに参加する等、ボーダーレスに幅広い知識を習得し、お客様の満足度を向上できる環境を用意している。

もうひとつの具体例として、本地域の農産物は、大量生産・集荷がシステム化されているため、住民が地産の農産物を消費することが難しい状況にある。こうした中、丘陵地で育った採れたての美味しい農産物を地域住民が直接消費するために、一部の生産者が共同で市場を運営している。本協議会ではこうした「顔が見える農産物販売」の取組みに、土壌や地形と深く関連していることの付加価値と広く情報発信することで、ブランド化、集客を支援していく。

E.7.2 パートナーシップ

1. パートナーシップの構築

本協議会は、設立時から地元観光協会、商工会、農業協同組合、ボランティア団体などをメンバーとしており、本構想運営のあらゆる場面において協力関係にある。必要に応じて、より専門的な組織からなる専門部会を構築し、企画、立案、事業実行を推進する（表7参照）。

運営組織以外にも、大雪山国立公園携帯トイレ普及パートナーや、美瑛観光ルールマナー110番等、この地域の環境と資源を守る組織とパートナーシップを構築し、啓発活動を行っている。

また本地域では、ジオパーク活動に取り組む以前から、交流人口の増加と共に観光ガイド、山岳ガイド、自然ガイド、サイクリングガイド、写真ガイド等が存在している。これらのガイドと連携しながら来訪者ニーズの多様化、防災対策、高山地域の保全、農地への無断立ち入りなどの課題解決に当たれるよう、関係団体と協力してガイド養成を行っている（表14）。

表 14 ガイド養成で連携している団体

一般社団法人 美瑛町観光協会	会長 後路 宜伸
一般社団法人 かみふらの十勝岳観光協会	会長 青野 範子
丘のまちびえいDMO	CEO後路 宜伸

2. ブランド戦略

本構想のロゴマークは、噴煙を上げる十勝岳と色彩豊かな波状丘陵をモチーフとしており、地域のイメージを的確に伝える明るいデザインとなっている。このロゴマークの使用については「使用マニュアル」および「使用規定」を設けており、本構想のPRや推進に寄与する活動での使用を推奨している。現在は、本構想のグッズへ使用のほか、本協議会構成メンバーや両町役場職員が名刺や名札、各種印刷物などに併記して、本構想の普及に利用している。

また、「ジオの店」「ジオの宿」認証制度の導入を検討している。地元産品を提供するレストランや小売店を「ジオの店」、ジオパークサポーターの在籍するホテル・旅館等を「ジオの宿」として認証する制度で、本構想ブランドを利用した地域振興施策として、今後、観光・ツーリズム部会等で検討していく。

3. パートナーシップによる事業展開

本協議会では、2020（令和2）年度から本構想の普及促進を図り、収益金の一部を活用して地域振興や環境保全への取り組みを支援する活動を実施している。その第一歩として、産業部会が指名する団体で構成する商品開発作業部会（表15）を設置した。この公式グッズの製造・販売に関する委託契約を締結し、消費者の意向を在庫調整に反映させたり、新たな商品開発に必要な情報を集約したりと、本構想ブランドを推進すべく、美瑛・上富良野両町の団体が協力して、地

場の活性化を目指している。ジオパーク活動を通じ、2町がはじめて共通の商品の開発・販売する契機となった。

初年度の2020（令和2）年度は、十勝岳ジオパーク構想公式「Tシャツ」「フェイスタオル」「トートバッグ」を開発し、販売を開始した（図21）。商品は本協議会が直接販売するのではなく、地域内の12店舗と委託契約を結び、パートナーシップを構築している。

表15 商品開発作業部会のメンバー

団体名	職名	氏名
上富良野町商工会	事務局長	高尾裕則
かみふらの十勝岳観光協会	会長	青野範子
美瑛町商工会	事務局	田原寛明
美瑛町物産公社	総括	梶 由貴



図21 十勝岳ジオパーク構想の公式グッズ（Tシャツ、フェイスタオル、トートバッグ）

4. パートナーシップの促進

現在のところ、ガイド育成に関する協定を4者（本協議会、美瑛町観光協会、かみふらの十勝岳観光協会、丘のまちびえいDMO）と、公式グッズ販売に関する契約を12店舗と結んでいるほかは、「ジオの店」「ジオの宿」認証制度の導入を検討している。今後は、本協議会構成メンバーに限らず、地域の活動団体や商業施設、商店、旅館、ホテル、観光業者などと書面によるパートナーシップを締結し、ジオパーク活動の推進が地域の振興に貢献できるよう事業展開を進めていきたい。

E.7.3 地元コミュニティや先住民族の全面的かつ効果的な参加

1. 地元コミュニティや先住民族の参画

本協議会には、「行政」「防災・教育」「産業」「観光・ツーリズム」「地域・普及」の5の専門部会を設け（図14および表7）、具体的な活動の計画と実行にあたっている。専門部会の構成メンバーは、表7に示した通り、地域内の様々な活動団体や企業が加わっており、地域コミュニティの意向を活動に取り入れている。

2019（平成 31）年には、地域住民やジオサポーター養成講座受講生、登山愛好者らが中心となり、地域の住民がジオパーク活動を楽しみながら活動を応援する「十勝岳ジオくらぶ」を設立した。設立当初の会員は 27 名で、現在約 40 名まで増えている。2020（令和 2）年度には、上富良野町郷土館の改修に向けて十勝岳ジオくらぶが意見交換会を実施するなど、ジオパーク準備地域の運営に深くかかわっている。

なお、当申請地域には、近世以前からアイヌ民族は居住しておらず、先住民族は存在しない。

2. 地元コミュニティによる取組み

十勝岳ジオくらぶは、十勝岳ジオパーク構想の普及・活用を目的に地域イベントに参加、地域住民がより活動に参加しやすい環境を整えている。また、月 1 回の定例会では、花の富良野岳登山、山麓の遊歩道トレッキングに留まらず、山岳エリアでのヨガ教室や地元食材を使ったお菓子づくりなど会員が地域をより理解し楽しむ活動が進められている。

また、環境ボランティアを行っている「NPO 法人野山人」では、人と自然のつながりを知り、歴史を体感することを目的に、地域をめぐるフットパスを行っている。具体的には、三浦綾子「泥流地帯」にまつわる被災地・記念碑などや、先住民アイヌの足跡を探るツアーが実施されている。

さらに、活火山の恵みと脅威を活力に「十勝岳の魅力再発見プロジェクト」として、企業版ふるさと納税を活用し、「泥流地帯映画化を進める会」が「泥流地帯」の映画化に取り組んでいる。

E.8 ネットワーク活動

1. 日本ジオパークネットワーク等との活動

本地域は、2017（平成 27）年に日本ジオパークネットワークに準会員として登録後、毎年度全国大会や全国研修会等に活動団体、構成団体と共に参加し各地域の特色を学んできた。また、北海道ブロックの取組みにも積極的に参加し、ガイド技術の向上や各種の情報交換に努めている。この他、北海道内の各ジオパークへの視察研修をはじめ、各地で開催されているイベントにも積極的に参加し、本構想が目指す「火山と共生するまちづくり」を来訪者に伝えている。行政が主催する北海道ジオパーク連絡会にも参加し、ネットワークの推進と各種の情報交換・共有を図っている。

2020（令和 2）年度は、COVID19 対策の影響でイベントの中止や縮小が続いているが、JGN 公式サイト「おうちでジオパーク」を通じての動画コンテンツ配信（2020 年 5 月以降）を始め、「知る！観る！学ぶ！北海道のジオパーク展」（2020 年 10 月、NoMaps 主催）への出展、「大人のジオ・フェスティバル in Sapporo 2020」（2020 年 12 月）への動画出品、伊豆半島ユネスコ世界ジオパークのガイド団体とのオンライン交流（2020 年 12 月）、「第 16 回 JGN 全国研修会（防災減災啓発 2021 年 2 月）」など、各地のイベント参加に取り組んでいる。

2. 専門分野におけるネットワーク

本地域における地質地形の研究推進と、地域資源の学術的評価、ジオサイトの登録抹消などに必要な協議の場として、学識顧問および専門員よりなる学術会議を設置している。これによっ

て、北海道立総合研究機構、北海道教育大学旭川校、北海道大学地震火山研究観測センター、および本協議会からなる専門家のネットワークとなっている。北海道大学や北海道教育大学旭川校とは、ジオパーク活動への学術的支援と大学が行う教育研究支援を目的とした相互協定の締結を目指している。

E.9 地質鉱物資源の販売

本協議会およびその構成団体、協力団体は、地質鉱物資源の販売をおこなっていない。また、申請地域内の土産物店等においても、岩石、鉱物、化石の販売はおこなわれていない。

E.10 防災・安全対策、防災教育、災害対応

地域総合防災訓練

美瑛町・上富良野町を含め6市町30団体機関が実施する十勝岳の噴火を想定した「総合防災訓練」に本協議会も参加している。美瑛町では十勝岳山麓の白金地区避難対策を担当する白金現地本部に、上富良野町では上川総合振興局に設置された合同本部会議に、職員を派遣し、現地における避難所運営や関係機関による情報共有について確認をおこなっている。

また、十勝岳火山防災協議会が主催する十勝岳火口の観測登山に同行し（図9）、噴火口や噴煙などの状況を観察したほか、関係者に対して堆積物や火山弾の解説などを行った。

防災活動

日常的に地球科学遺産に接し、ジオパーク活動を体験することは、変動する地球への理解を促し、災害に備えようとする意識と、災害時の「自助」「共助」の力を養うと考えている。そこで本地域は、自助、共助、公助を次のように位置づけ、ジオパーク活動と連携しながら「命を守る」地域づくりを第一に考えている。

- 1) 自助：ジオパークの諸活動を通じて地学に関する知識を学び、地域の歴史を理解することで、地域住民の中で防災に関する知識と意識を高め、自然災害発生時に地域の中で迅速な対応が取れるようにする。
- 2) 共助：恒常的に地学的事象に関しての関心を高め、地域や職場の様々な場面で自然災害について考えるリーダー的役割をジオガイドが担い、地域コミュニティの防災減災力を上げる。
- 3) 公助：地域住民が参加する防災ワークショップなどを開催して、避難経路の見直しや地域防災計画の改訂時に地域住民の立場で意見を述べてもらうなど、地域住民と行政が協力して防災事業をすすめる。

十勝岳では多くの登山者やバックカントリースキーヤー、スノーボーダーなどの安全対策も重要な課題であり、2018（平成30）年度には登山口にあたる望岳台に大型シェルターが完成した。しかし、火口を取り囲むように存在する登山道には一時避難できるシェルターが整備されていない。火山活動の履歴と噴火のメカニズムを検証し、火口からの噴石や火砕流、溶岩流などの影響を科学的に発信し、国や関係機関と連携することで、登山中の噴火に対する適切な安全対策を進めていく。

また、2016（平成28）年7～8月には、台風による豪雨災害が発生した。このとき、本協議会

事務局では、Facebook を使って台風情報と解説を発信した。当時は、本協議会の認知度が低く、多くの人に情報が伝わったわけでないが、今後も、災害時にはインターネット等を利用した迅速な情報発信に努めていく。

防災教育

火山と共生するまちづくりを進める本地域では、国土交通省北海道開発局旭川開発建設部や北海道上川総合振興局旭川建設管理部と連携して、火山災害と復興を通じた郷土の学習に取り組んでいる（図 22、表 10）。火山噴火や泥流・土石流発生のおそれについての実験や砂防施設の現地見学のほか、災害から命を守る「自助・共助・公助」について学ぶ機会が提供されている。



図 22 国土交通省北海道開発局による火山見学（左）および北海道上川総合振興局による砂防施設見学（右）の様子。

防災ツーリズム

本構想では、火山噴火や防災をテーマとしたジオツーリズムを行っている。例えば、標高 930m の登山口（望岳台）から十勝岳の噴火口や、溶岩流、火砕流堆積物などをめぐるツアーや、十勝岳温泉からヌッカクシ火口をめぐるツアーなど、活火山そのものを体感できるコースを提供している。また、1926（大正 15）年噴火の遺構と被災地をめぐるツアーを、ジオガイドが中心となって開発した。とくに、この噴火をモチーフとした三浦綾子氏の小説『泥流地帯』のストーリーをたどりながら現地を歩くことで（図 23）、火山噴火の実態や、当時の開拓農家の生活、復興の歴史などをよりドラマチックに実感できる。単なる自然現象としての火山活動でなく、人の暮らしとのつながりが体感できる。このような「防災ツーリズム」の推進は、防災教育や、火山との共生の実現を目指す本構想の主要事業といえよう。



図 23 1926 噴火の痕跡をめぐる『泥流地帯』ジオツアー（2020 年 9 月）

F 日本ジオパーク認定を希望する背景と理由

私たち十勝岳ジオパーク構想の活動エリアである美瑛町と上富良野町は、わが国有数の活動的火山である十勝岳を町境に抱え、共通の地球科学的背景すなわち災害発生史を共有している。これまでも2町は火山防災の分野において連携してはきたが、行政や経済活動においては、美瑛町は上川中部圏と、上富良野町は富良野圏の自治体との交流が中心であり、両者はいわば背中合わせの関係にあった。

しかし近年、十勝岳周辺では火山性地震や噴気活動、火映現象など、約30年ぶりに火山活動を活発化させている。十勝岳は、わずか95年前に144名の犠牲者を出し、その後も2回のマグマ噴火をおこなった。かつての悪夢を再び繰り返さないためには、二つの町が一体となり、世界の火山地域と協力し、地球が生きているさまを謙虚に学び、活火山と共生するすべを模索する以外にない。仕合せにも、この地は美しい景観と豊かな自然環境に恵まれている。この自然の恵みを最大限に生かし、変動する大地に学び、全世界とパートナーシップを結ぶことができれば、当地は災害や環境変動に強い地域となり、やがては火山防災の分野で世界に範を示すリーダーとなりえよう。

私たちは、地球科学に立脚した教育・研究を推進し、地球環境と地域遺産の保全と活用を手段として、持続可能な地域の発展を目指すというユネスコ世界ジオパークの理念に共感し、世界のあらゆる地域と協力・連携して「地球と共生する地域づくり」を推進する。

私たちは、ジオパークとして認定を受け、「十勝岳ジオパーク」として活動することで、次にかかげる目標を実現したいと考えている。

- ・ いつかおきる火山災害に、地域全体で協力して備える
- ・ 火山と自然について地域みなで学ぶ
- ・ 恵まれた環境とふるさとの文化を次世代に確実に受け渡す
- ・ 地域を愛する人材を育成する
- ・ 世界の様々な地域と連携しパートナーシップを構築する

十勝岳ジオパーク構想エリアの優れた景観は、数千万年にわたるプレート運動、数百万年間の火山活動と気候変動、そして、自然の恵みを大切に活火山との共生を試みる地域住民の営みがつくりあげてきた。このことを全世界にアピールするとともに、地域に残された諸問題、すなわち、地球温暖化にともなう気象災害、あらゆるジオハザード、人口減少とコミュニティの縮小、地域資源のオーバーユースと観光公害、といった問題について広く世界と情報共有し、議論し、より良い将来のためにも行動することを希望する。

私たちにとってジオパークネットワークへの加盟は必要不可欠な第一歩であり、ここに日本ジオパーク認定を申請する。

作成：十勝岳ジオパーク推進協議会

北海道上川郡美瑛町本町4丁目6番1号

TEL 0166-76-4004

FAX 0166-76-4005

E mail info@tokachidake-geopark.jp



協議会HP